

ヨナ物語

旧約聖書・ヨナ書から

2015/07/10

1

昔々、ヨナさんという人がいました。ヨナさんはこんな話を聞きました。

—東のほうにニネベという大きな町があって、ニネベの人たちはとても悪いことばかりしているというのです。人をいじめたり、いじわるをしたり、泥棒をしたり、人をなぐったり蹴ったりしている。神さまのことなんか忘れて、お祈りもぜんぜんしないそうです。

その話を聞いたヨナさんは、「ニネベなんか大嫌いだ、ニネベの人なんかぜんぶ死んでしまえばいい」と思っていました。

ところがある日、神さまの声が聞えました。

「ヨナさん、あなたはこれからニネベに出かけて行って、『みんな悪いことをやめなさい』とお話ししてきなさい」。

けれどもヨナさんはいやでした。だれがあんな大嫌いなニネベなんかに行くもんか。

「船が出るぞー」

ちょうどニネベとは反対の、西のほう、タルシシュ行きの船があったので、ヨナさんはその船に乗り込みました。神さまから逃げようと思ったのです。

ところがやがて海は大嵐になりました。ものすごい波、ものすごい風。船は右に左に上に下に大揺れに揺れて、今にも沈んでしまいそうです。大変だ。船が沈まないように荷物を捨てよう。船に積んである大きな荷物をどんどん捨て始めました。荷物を捨てて船を軽くしないと船は沈んでしまうのです。ところがそれでも嵐はやみません。

みんなはお祈りしはじめました。「海の神さま、助けてください」「金の神さま、助けてください」「銀の神さま、助けてください」「狐の神さま、助けてください」。みんな自分の神さまにお祈りしました。しかし嵐はやみません。ものすごい波があたって、船がもう碎けてしまいそうです。

そのときヨナさんは……。船の底でぐっすり眠っていました。船長は船の底まで降りていって「おい、ヨナさん、寝ているとは何事か。起きて、あなたの神さまに祈りなさい」

船の人々は言いました。こんなに恐ろしいことになったのは、だれかが何か間違っただけのことからではないか。神さまから逃げ出した人がこの船にいるのではないか。

「だれのせいでこんなことになったか、くじを引こう」

みんながくじを引きました。すると、そのくじは、ヨナさんに当たったのです。

「ヨナさん、あなたはどういう人か。何をしたのか。どこへ行くのか。」

ヨナさんは答えました。「わたしは天の神さまを信じる者です。実はわたしは神さまから逃げて、タルシシュへ行くつもりでこの船に乗ったのです。」

「何ということをしたのだ。」

嵐はどんどんますますひどくなり、このままでは船が沈んでしまいます。いったいどうしたらよいか。

ヨナさんは言いました。

「こうなったのはわたしのせいです。わたしの足と手を縛ってわたしを海に投げ込みなさい。そうすれば助かるでしょう。」

そんなことできない！

でも波が船の中に打ち寄せてもう船が砕けそうです。

「ヨナさん、ゆるしてくれ。神さま、ゆるしてください。助けてください」

と言いながら、みんなはヨナさんの手と足を縛り、海に投げ込みました。ドボン……

すると、風はやみ、波はおさまり、海はすっかり静かになりました。

海に投げ込まれたヨナさんはどうなったのでしょうか。

海の中に大きな魚がいました。これ礼拝堂くらいもある大きな魚です。神さまがその魚に「ヨナさんを呑み込みなさい」と言われたので、大きい魚はヨナさんを呑み込んでしまいました。

呑み込まれたヨナさんは魚のおなかの中。真っ暗で何も見えません。

「神さま、助けてください。助けてください」とヨナサンはお祈りしました。

2

ヨナさんは考えました。どうしてこんなことになったのだろうか。

「神さま。ぼくが悪かったのです。神さまがニネベに行くように言われたのに、ぼくはニネベが大嫌いで逃げ出してしまいました。ぼくが神さまから逃げたのがいけなかったのです。ゆるしてください。こんな暗いところに閉じ込められて出ることができません。助けてください。」

ヨナさんはこわかった。ひとりぼっちで寂しかった。魚のおなかの中でずっとお祈りしていました。一日、二日、三日。ずっとお祈りしていました。

神さまは大きな魚に言われました。

「魚さん、ヨナさんを出してあげなさい。」

すると大きな魚はヨナさんを吐き出したので、ヨナさんは魚の大きな口からポンと外に出て来ました。

明るい。まぶしい。助かった。

神さま、ありがとうございます。

神さまが言われました。

「さあ、ニネベに行って、わたしが言う言葉を伝えなさい」

前は神さまから逃げたヨナさんは、今度は神さまの言われたことを聞き、ニネベに行きました。そのころ、ニネベの人たちは悪いことばかりしていたのです。ヨナさんはニネベの町の人たちに向かって大きな声で言いました。

「ニネベのみなさん、この町は滅ぼされてしまいます。みんなが悪いことばかりしているので、神さまがもうニネベの町全部を火で焼いてしまわれるでしょう。」

するとそれを聞いたニネベの人たちは、ドキッとしました。大変だ。このままでは神さまに滅ぼされてしまう。町のひとみんなが出て来ました。若い人もお年寄りも、役人も金持ちも、それから王様も出て来ました。ニネベの王様は地面の上にしゃがみ込んでお祈りしました。

「神さま、どうかゆるしてください」。みんなもお祈りしました。「神さま、どうかゆるしてください。もう悪いことはしません」。

みんな何も食わず、水も飲まず、いっしょうけんめいお祈りしました。ほんとうに自分たちはまちがっていたと思ったのです。

それをご覧になった神さまは、ニネベの人たちをゆるしてくださいました。みんなが自分のしてきた悪いことに気がついて、「ごめんなさい」と言ったので、神さまはとてうれしかったのです。

ところがヨナさんは、うれしくありませんでした。

ヨナさんはとてとても怒っていました。ニネベの町の人たちは皆悪いことばかりしているので、みんな死んでしまえばよい、神さまが天から火を降らせて皆燃えてしまえばよい、と思っていたのです。ところが、ヨナさんがニネベに行って「お前たちは悪いことばかりしているから、滅びてしまおうぞ」と話したところ、ニネベの王様もみんなも出て来て、「神さま、私たちが間違っていました。ゆるしてください」とお祈りしたので、神さまはゆるしてくださいました。

ヨナさんは神さまに言いました。

「神さま、こうなることが分かっていたから、ぼくはニネベに行きたくなかったのです。神さまは優しすぎる。あんな悪いニネベなんか滅ぼしてしまえばよかったのに。ぼくはもう死んだ方がましだ。」

神さまは言われました。「お前は怒っているが、それは正しいか。」

3

ヨナさんはニネベの町を出て、石の上に座り込んで、ニネベの町をにらみつけていました。お日さまが上ってきてカンカン照り。暑くて暑くてたまりません。ああ、苦しい。

すると神さまは言われました。

「とうごまさん、大きくなってヨナさんの上に陰を作ってあげなさい。」

するととうごまの木が地面から生えてきて、するするすると大きくなって、ヨナさんの頭の上まで伸び、葉っぱが茂って陰を作ってくれました。ああ、涼しい。ヨナさんはとてもうれしくなりました。ニネベの人をゆるしてやってもいいか。

ところが、次の日の朝、大きな虫がやってきて、とうごまの木をばくばくむしゃむしゃと食べてしまったので、とうとうとうごまの木は枯れてしまいました。お日さまが上ってくるとカンカン照り。暑くて暑くて死にそうです。ヨナさんはカーッと腹が立ってきました。こんなことになったのは神さまのせいだ。ニネベは燃えてしまえ。

神さまは言われました。「ヨナさん、お前は怒っているが、それは正しいか。」

「もちろんです。ぼくは腹が立って死んでしまいたい。」

「お前の気持ちは分かる。しかしお前はとうごまの木を大事に思っていたらう。わたしもニネベのことを大事に思っているのだ。ニネベには子どもも赤ちゃんも、お父さんもお母さんも、おじいさんもおばあさんも、犬もねこもいる。わたしはニネベの人たちを助けたかったのだ。」

ヨナさんはそれを聞いて、神さまの気持ちも考えるようになりました。

神さま、あなたはニネベの人たちのことも、ヨナさんのことも大切に思ってくださいました。あなたは私たちの気持ちも分かってくださいます。私たちも悲しんでいる人の気持ち、腹を立てている人の気持ちを分かってあげることができるようにしてください。アーメン